柏戸の真実 ⑦

親方生活スタート（上）

昭和44年名古屋引退

横綱柏戸記念館は故郷・鶴岡市櫛引地域の赤川に面した日帰り温泉「ゆ～Ｔｏｗｎ」のすぐそばにある。平成16（２００４）年11月完成で今年16年目。柏戸が亡くなって8年後、自らが率いた鏡山部屋の稽古場・上がり座敷をそのまま移築した。旧櫛引町営で今は鶴岡市が管理・運営している。入場無料で開館は朝9時～午後5時。現役時代の三つぞろえの化粧まわし、横綱推挙状などゆかりのものが展示されている。

昭和44（1969）年7月の名古屋場所限り、30歳で引退した柏戸は以後、鏡山親方として親方業に励むことになった。

親方でも柏鵬戦を

生来のあっさりした性格もあって、自前の弟子育成には当初それほど積極的ではなく「俺は独立なんかしない。気楽な立場で後輩たちの指導に当たりたい」と漏らしていた。一方ライバル大鵬は着々優勝回数を増やし優勝32回。相撲協会初の一代年寄として「大鵬部屋」を創設することになった。内弟子もそろえ始めた。そうなると柏戸の後援者たちも、今度は弟子の育成・指導による「柏鵬戦第二弾を」と盛り上がってきた。状況的には所属した伊勢ノ海部屋の後継というのも考えられた。相撲協会は65歳が定年。柏戸が引退した時点で師匠は51歳だった。14年後に部屋を継ぐかどうかは置いといて〝まずは独立を〟の流れができた。

記念館の稽古場は鏡山部屋をそのまま移築した

記者クラブを担当

協会内の親方業務として、引退1年後に記者クラブ担当となった。元人気力士に回ってくるポジション。関取衆の場所ごとの成績表を整理する仕事では、若い記者に尋ねながら○●と決まり手を記入した。大きな背中を丸め、慣れないペンを持ちながら、記者たちに溶け込んでいった。

独立へ一つのきっかけが新居の予定地だった。引退前年結婚したセツ子夫人との一戸建て用は東京と千葉県の境にある江戸川区北小岩八丁目にあった。江戸川区は戦中の疎開児童受け入れをきっかけに鶴岡市と友好都市を組んでいる間柄だが都内最東端にある。相撲場のある蔵前、両国に比べ、都心から離れている分、地価は手頃だった。

都内北小岩に部屋を

その土地は国鉄（現ＪＲ）総武線・小岩駅近くに実家があったセツ子の関係筋が見いだしたものだった。

セツ子の実家は相撲案内所を経営していた。屋号は「紀乃国家」。もともとは「相撲茶屋」と呼ばれ、相撲協会に代わってマス席など入場券を売り、観戦時に料理や土産物を提供する業務で、大相撲とは深い結びつきがあった。加えてセツ子の実父は結婚時は既に亡くなっていたが、元小結・桜錦（青森県出身）だった。双葉山全盛時に打倒双葉を掲げた名門出羽海一門の軍師を務めた人で引退後は出羽海部屋付きで高崎親方として指導、またスポーツ新聞の専属評論家を務めていた。そうしたセツ子の実家筋からも「独立するなら手伝いたい」と申し出があった。本当は広々と取った敷地の多くは庭にして、子どもの遊び場としてブランコなどを置くつもりでいた。

44年8月29日、部屋の上棟式が行われ、11月の九州場所では新弟子検査で3人が合格した。地元庄内からも合格した。後に関取に昇進、部屋を盛り上げた魄龍（はくりゅう）だが入門まで一波乱あった。

＝敬称略＝

（富樫　嘉美）

毎週火曜日付に掲載